

Column

3

「ラジオ塔」という メディア遺構

丸山 友美 (静岡大学)

1. ラジオ塔とは何か

戦前から戦後にかけて家庭に広く普及し、今ではすっかりオール・メディアになったラジオは、戦前・戦中の一時期においてその居場所は、家の外にもあった。街頭に置かれ受信機を備えた灯籠のような建造物を、人々は「ラジオ塔」と呼んだ。ラジオ塔は、『日本放送協会史』の説明に従えば、「日常公衆の利用に便し、周知宣伝に資すると共に、非常時に於ける放送当事者と一般大衆との連絡機関として警報その他の特殊放送を伝達すべき重要使命」（社団法人日本放送協会編 1939：357-358）を担うメディア技術だった。現存するラジオ塔の多くは、すでにその機能を失っている。2017年に発見された東大阪市の一基を見に出かけたのをきっかけに（図1、図2）¹⁾、筆者はこのメディア遺構の調査に着手した。

本コラムは、これまでに筆者が発表した三つの論稿（2021、2022、2023）を踏まえつつ、ラジオが私たちの生活に普及するまでの過程をラジオ塔という技術から描出する。まずは、大阪・天王寺公園にラジオ塔が建設された理由を説明する。次に、ラジオ塔が全国化していく経緯を論じる。最後に、市民がラジオ塔の建設と寄付にまい進した過去を



図1 2017年に大阪府東大阪市で発見された大和公園のラジオ塔
(2017年8月30日筆者撮影)



図2 兵庫県明石市中崎遊園地のラジオ塔
(2017年8月31日筆者撮影)

紹介する。

2. BK発のラジオ塔

日本に現存するラジオ塔は、一幡公平がまとめた『ラヂオ塔大百科 2011-2014』（2014）や『ラヂオ塔大百科 2017』（2017）において確認することができる。一幡によれば、ラジオ放送事業が開始したこのころはラジオ受信機が高価だったことと、受信に際して聴取料の支払いが必要だったこともあってラジオは思うように普及せず、その打開策として「誰でも自由にラジオ放送を聞くことのできる施設として」（一幡 2014：4）ラジオ塔は開発されたという。ラジオが思うように普及しなかった放送事業初期の様子は、山口誠（2008）も論じている。山口は、日本放送協会が事業開始の1925（大正14）年から聴取加入者100万を達成した1932（昭和7）年までに7年も費やした原因に、聴取契約を解く「廃止者の数が影響」（山口 2008：227）したと指摘する。この時期、廃止理由の上位を占めたのは「転居（含帰郷）」と「家事都合」、そして「受信機故障」（日本放送協会総合放送文化研究所放送史編修室編 1969：28）などだった。

無論、日本放送協会は、ただ手をこまねいていたわけではない。特に、関西支部（以下BK²⁾）の計画部は、宣伝活動が重要であることを強く自覚していた（日本放送協会総合放送文化研究所放送史編修室編 1969：34）。1928年10月に総務部企画課へ改編されるこの部局の仕事は、人々に「ラジオとともにある生活」をけんでんすることで放送事業に対する理解を深めることと、ラジオ受信機器を広く普及させることだった。そのために彼らは、個別訪問してラジオに関する聴取者の意見を集めたり、受信機器の普及や維持のために講習所やラジオセット組立練習所を設置したり、人の集まる場所に高声機（大拡声機）を設置して放

送を聴取できるよう拡大受信に取り組んだり、各種印刷物を掲示・配布したりした（日本放送協会総合放送文化研究所放送史編修室編 1969：35-38）。その内の一つだった拡大受信を発展させ、一般聴取者がスイッチを押せばいつでも自由に放送を聴取できるようにしたのが「常設拡大受信設備」（日本放送協会総合放送文化研究所放送史編修室編 1969：176）として1930年6月に大阪・天王寺公園の旧音楽堂跡に完成したラジオ塔だった（図3）³⁾。

ラジオ塔は、放送があるときならば誰でも番組を自由に聴取できる常設型の拡大受信設備として構想された。それまでの拡大受信は、人のよく集まる場所に高声機（これも拡大受信装置と呼ばれた）を設置して放送中の番組を公開聴取させる試みとして行われた。それは企画課のスタッフがいつ・どこで・どのプログラムを実施するか決めており、聴取者の反応や番組に応じて場所を移動した。これに対し、「常設拡大受信設備」として考案されたラジオ塔は据え置きで、一般聴衆が付属のスイッチを一度押せば10分程度放送が流れいつでも自由に番組を聞ける点で違いがあった。

このようにBK企画課で考案されたラジオ塔は、1932年の聴取加入者100万突破を祝う日本放送協会の記念事業に組み込まれ、全国展開の緒に就く。だがラジオ塔は、この事業を通してすぐに、ナショナルで均質的なものとして消費されるようになったわけではなかった。むしろ、BK以外の支部管内に新設されたラジオ塔も、ローカルで固有な経験を有する技術として人々の前に現れていた。

3. 全国で建設が始まるラジオ塔

次は、記念事業の一環で、関東支部（以下AK⁴⁾）管内の横浜・野毛山に1932（昭和7）年に完成したラジオ塔を見ていこう（図4）。同年



図3 「BK自慢の我国最初のラヂオ塔」
(1930年6月6日『日刊ラヂオ新聞』1面)



図4 横浜市西区野毛山公園のラジオ塔
(2019年11月24日筆者撮影)

7月12日発行の『横浜貿易新報』7面上部の記事の見出しには、読者の目を引く言葉が並ぶ。いわく、「横浜に放送局を設置」して「ラヂオ大衆化を計画」していると「JOAKから秘密に提案」があり、これに横浜市当局は「会議所等とともに実現促進運動を」行うつもりでいる。記事によれば、東京から近すぎることを理由に逓信省が二の足を踏む横浜放送局の開局に対し、AKはその計画を明かして横浜市に協力を求めてきたという。それは横浜市にとって魅力的な申し出だったから、村山昭一郎助役を中心に商工会議所などを巻き込んで実現促進運動に着手するという報道だった。

そもそも横浜はラジオに対する関心が初期から高い地域だった。1925年、AKがラジオ本放送を始めたこの年の8月末、横浜市内で聴取加入を申し込んだ市民は1,633件という少なさだったが、1年後には3倍以上の5,815件にまで増加した（百瀬 2010：1）。当時の現住戸数から鑑みれば、その割合は6%にとどまっておri（百瀬 2010：1）、加入していない市民のほうが大多数だった。市内全体の聴取加入率は高くなかったが、1年で聴取加入者数が自然に増えていることを思

えば、横浜で放送事業の宣伝を実施する意義は十分にある。

だが、電波行政を統制する逓信省は難色を示し続け、横浜放送局の設置はなかなか承認されない。そんな状況を打破したいAKは、次の提案を横浜市に持ち掛ける。それが横浜公園にラジオ塔を建設するという計画だった。同年8月5日発行の『横浜貿易新報』7面には、「横浜公園ヘラチオ塔建設 放送局の申出に市当局も大乘気」という見出しで、横浜放送局設置に関する続報が掲載されている。そこでは横浜に放送局を新設すべく交渉を続けるなかで、AKが横浜市にラジオ塔の寄付を申し出たことが報じられている。その候補地に、横浜市は「公園に対する施設の分散主義をとってある関係から」野毛山公園を推すが、AKは「人出の少い野毛山よりも横浜公園の児童遊戯場あたりが一番いゝ」と希望しており、両者で建設場所の調整が行われる様子が記録されている。

次に関連記事が掲載されるのは同月27日発行の同紙3面だが、ここには横浜放送局開局に関する記載は一切ない。主題はラジオ塔の設置場所が野毛山でほぼ確定したと設計計画が完成したことである。AK企画課の意向とは異なり、結果的に横浜のラジオ塔は野毛山公園に建設され、1932年11月20日に「横濱新名物の一つ」としてハマっ子の前に現れた（「野毛山の放送塔あす愈々除幕」『横浜貿易新報』1932年11月19日7面／「早慶戦と濱自慢に ラチオ塔初見参」『横浜貿易新報』1932年11月21日5面）。日本放送協会の記念事業の一環でラジオ塔の建設は全国一斉に開始した。しかし、野毛山のラジオ塔建設をめぐる交渉過程から明らかのように、そこでは決して均質的で凡庸な建設計画が遂行されたわけではなかった。ここから推測されるのは、ラジオ塔は「公衆の聴取便宜の増進を計ると共に[放送]事業周知宣伝の一助」（日本放送協会編 1933：71）となるよう標準化された建造物だったわけではなく、企画課と建設地域の自治体とが話し合っ場所と形を

決めるローカルで固有な経験を有する技術として人々の前に現れていたということである。

4. 市民の建設したラジオ塔

こうして全国に普及しはじめたラジオ塔は、1938(昭和13)年から1939年ころに展開される「一戸一受信機」キャンペーンにおいて、「国民に重要放送を“必聴”させるため」の「各種施設」の一つと定義し直された(日本放送協会放送史編修室 1965: 306, 324)。ラジオ塔は「神社・寺院・役場・市場・郵便局」に加え、1938年からは「駅・渡船場など」にも建設されるようになり、「警報その他の伝達放送に一役を買う」(日本放送協会放送史編修室 1965: 481-482)ものとして消費されるようになった。こうしたラジオ塔の意味変容からうかがい知れるのは、どこに建設するのか、どんな形にするのかと各支部の企画課と自治体が対話する過程より、その数が重視されるようになったことだろう。

ラジオ塔が急増する1940年代、興味深いのは、その建設に市民が参加した足跡を確認できることだ。愛知県名古屋市東区にある「市政資料館」には、戦中に名古屋市に寄付されたラジオ塔に関する公文書が10件保存されている(丸山 2023: 7)。注目したいのは「道徳新町自治連合会代表外1名より道徳公園へラジオ塔」(簿冊ID6492, 索引番号81, 連番1)という公文書である(図5)。

ここには市民が記した「寄附採納願」と「趣意書」(図6)、そして「道徳公園ラジオ塔新設工事仕様書」がつづられている。この「趣意書」には、ラジオ塔を寄付するに至る経緯が書かれている。紙幅の関係から筆者による大意を記す。「中国大陸が大和民族の第二の郷土になる日が近いにも拘らず、第二国民の体格の貧弱ぶりが目に余る。これをきつ



図5 現在の道徳公園にはラジオ塔の台座と思われる遺構だけが残る (2019年2月3日筆者撮影)

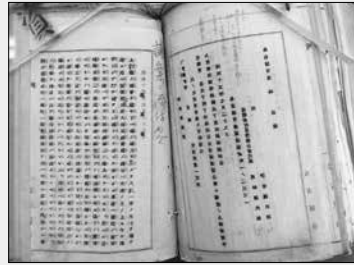


図6 「道徳新町自治連合会代表外1名より道徳公園へラジオ塔」より「趣意書」 (2022年11月18日筆者撮影)

けに国運が悪化するのを見逃さず、国民は体位向上を図って民族発展の基礎を築くべきである。手始めに、道徳新町では早朝のラジオ体操の会を開くことにした。皇太子殿下御降誕記念事業の一環で道徳公園が新設されるので、ここを利用する。また1940年は皇紀2600年という記念の年でもあるので、これを祝して公園にラジオ塔を建設・寄付することを決議した。工費予算は600円である。敷地をご指定いただいた上、建設の許可を賜れば幸いである」

このように市民の記したラジオ塔建設の趣意書を理解するとき、その目的が、当初のそれと大きく変わっていることに気づく。最初期、ラジオ塔は聴取加入契約を廃止する数を抑制するため、BK企画課の人々が放送事業の宣伝とラジオ受信機の普及を目指して開発したものだ。やがて、そのアイデアは日本放送協会の聴取加入者100万突破の記念事業に組み込まれ、全国で一斉に建設されるようになった。すでに見たようにその試みは、各支部の企画課と建設候補地の自治体が交渉して場所と形を決めていた。残念なのは、そのようなラジオ塔の固有性や雑多性が、ラジオ体操を通じた国威発揚や「一戸一受信機」キャンペーンと結び付けられたことで、収れんさせられてしまったことだろう。

注

- 1) 「ラジオ塔が新たに東大阪で発見 地域のつながりや防災に有用、専門家「コミュニティの中心になる」」『The Sankei News』(<https://www.sankei.com/article/20170517-IDKF66TXFVOJZJVUCHGZONUGMI/>, 2023年7月31日アクセス)。このときの調査の記録は「大阪調査を実施しました!」『JOBKのメディア史研究会HP』(<https://jobk-mediahistory.com/articles/28>, 2023年6月30日アクセス)にて公開している。
- 2) 本コラムで記載する「AK」や「BK」、そして「CK」は、もともとは放送局のコールサイン「JOAK(東京)」「JOBK(大阪)」「JOCK(名古屋)」に由来するが、これをもじって、放送局の呼称として用いられている。
- 3) 「BK自慢の我国最初のラヂオ塔」『日刊ラヂオ新聞』(1930年6月6日1面)
- 4) 2) を参照。

引用・参考文献

- 一幡公平 (2014) 『ラヂオ塔大百科2011-2014』タカノメ特殊部隊
—— (2017) 『ラヂオ塔大百科2017』タカノメ特殊部隊
- 丸山友美 (2021) 「関西に残るメディア遺構——JOBKの建設したラジオ塔」『福山大学人間文化学部紀要』21: 13-25
—— (2022) 「関東に残るメディア遺構——JOAKの建設したラジオ塔」『福山大学人間文化学部紀要』22: 15-27
—— (2023) 「東海に残るメディア遺構——JOCKと市民の建設したラジオ塔」『福山大学人間文化学部紀要』23: 1-15
- 百瀬敏夫 (2010) 「昭和初期のラジオに関する一、二」横浜市史資料室編『市史通信』8,1-4
- 日本放送協会編 (1933) 『ラヂオ年鑑 昭和8年』日本放送出版協会
- 日本放送協会放送史編修室 (1965) 『日本放送史・上』日本放送出版協会
- 日本放送協会総合放送文化研究所放送史編修室編 (1969) 『放送史料集1 大阪・事業成績報告(1)』部内資料
- 社団法人日本放送協会 (1939) 『日本放送協会史』非売品
- 山口誠 (2008) 「放送とオーディエンスの関係を再考する——新たな放送モデルと公共性へのメディア史的試論」『放送メディア研究』5,221-249
- 『横浜貿易新報』「横浜に放送局を設置 ラヂオ大衆化を計画」(1932年7月12日7面)
—— 「横浜公園へラヂオ塔建設」(1932年8月5日7面)
—— 「ラヂオ塔建設 敷地位置は野毛山か」(1932年8月27日3面)
—— 「野毛山の放送塔あす愈々除幕」(1932年11月19日7面)
—— 「早慶戦と濱自慢に ラヂオ塔初見参」(1932年11月21日5面)



丸山 友美 (まるやま・ともみ)

静岡大学大学院情報学領域専任講師。分担執筆に、『テレビの民俗学（仮）』ナカニシヤ出版（近刊）／丹羽美之編『NNNドキュメント・クロニクル 1970-2019』東京大学出版会，2020年／塚田修一・西田善行編著『国道16号線スタディーズ——二〇〇〇年代の郊外とロードサイドを読む』青弓社，2018年がある。論文に，「女性ディレクターから見た初期テレビ制作の現場——フェミニスト・エスノグラフィーを用いたアーカイブ研究」『メディア研究』101号，2022年などがある。